

プロフェッショナル

【対談】武井敦彦

JATO (Japan Athletic Trainers' Organization) 理事、ATC、NASM-PES&CES、PRI-PRT、ITPA-CTPS、Passion Sports Training 代表、アスレティックトレーナー

スポーツ選手を現場で支える —アスレティックトレーナーの役割と今後の展望—

インタビュー：大関信武 一般社団法人日本スポーツ医学検定機構代表理事、東京医科歯科大学再生医療研究センター
(企画：日本スポーツ医学検定機構)

アスレティックトレーナーと ほかの職種の境界線

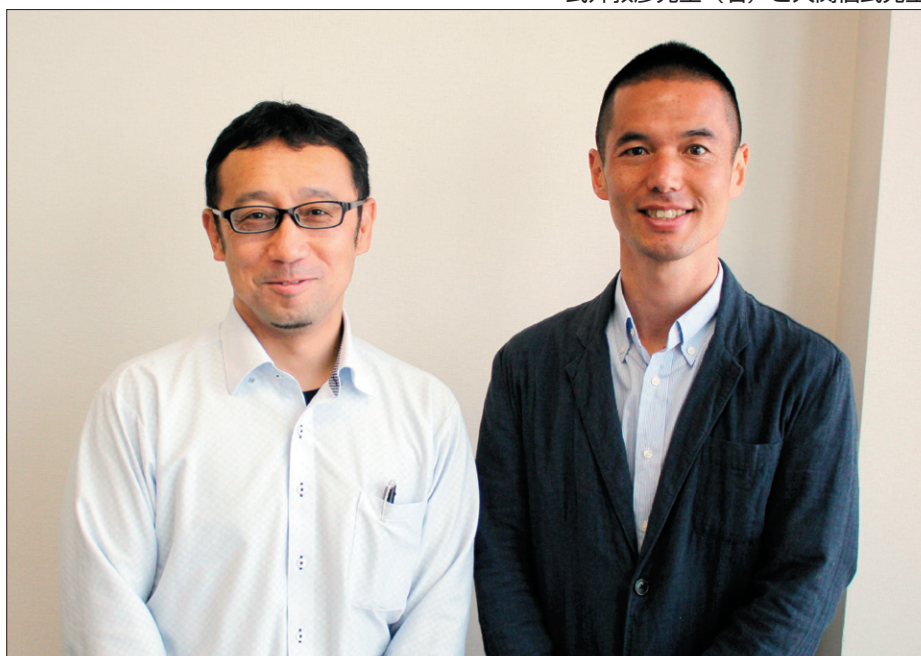
大関：まず基本的なことからお聞きしますが、アスレティックトレーナーはどのような仕事でしょうか？

武井：アスレティックトレーナーの仕事を簡潔に説明するとスポーツ傷害の予防、スポーツ傷害が生じたときの処置、競技復帰までのリハビリのサポートを行うことです。アスレティックトレーナーが生まれたアメリカでは、アメリカンフットボールなどが盛んで、スポーツ傷害発生も多いことから、現場で選手の対応ができる専門スタッフ、アスレティックトレーナーが必要不可欠ですので、そのような背景を元にこの職業が生まれたという背景がありますので、アスレティックトレーナーはスポーツ現場での仕事がメインです。

大関：アスレティックトレーナーの仕事はアメリカンフットボールから生まれたのですか？

武井：アメリカンフットボールでは頸部の損傷やいろいろなスポーツ傷害が多いため、現場で選手の対応ができる専門のスタッフが必要でした。そうした背景から自然発生的に生まれました。

大関：スポーツ現場からのニーズで生まれたのですね。スポーツ選手に関わる職種には理学療法士や柔道整復師、鍼灸・マッサージ、ストレングスコーチといった、さま



武井敦彦先生（右）と大関信武先生

ざまなものがあります。たとえば理学療法士とアスレティックトレーナーの違いはどのようなところでしょうか？

武井：理学療法士について詳しいわけではありませんが、一般的に理学療法士の基盤は病院内にあり、アスレティックトレーナーはスポーツ現場にある、というのが主な違いだと思います。理学療法士は病院の入院患者さんをリハビリテーションによって手術後から日常生活に戻すまで、つまりマイナスからゼロのレベルまでもっていくのが仕事であると思います。一方、アスレティックトレーナーは、スポーツ選手に対し

武井敦彦（たけい・あつひこ）

1980年東京生まれ。東京農業大学第一高等学校卒。ネバダ州立大学ラスベガス校スポーツ障害マネージメント学部卒。AT Still大学運動学部修士課程在籍。トレーナー歴としては、個人ではプロアスリート（野球、テニス、ビーチサッカー、バレー）、ジュニアアスリート（野球、テニス、馬術）。チームではMLBテキサスレンジャース（マイナーチーム）、MLBアリゾナダイヤモンドバックス（マイナーチーム）、横浜DeNAベイスターズ（1・2軍）、バルドール浦安、ビーチサッカー日本代表。取得資格：ATC (National Athletic Trainer's Association)、PES (National Academy of Sports Medicine)、CES (National Academy of Sports Medicine)、PRT (Postural Restoration Institute)、CTPS (International Tennis Performance Association)。2007年 MLBマイナーリーグ（パイオニアリーグ）ベストトレーナー受賞

て、ゼロからさらにアスリートとしてスポーツ復帰させるのが仕事と考えています。

大関：アスレティックトレーナーはケガを

していない選手にも関わることも多いですよ。ケガをしていない選手にはどのようなアプローチを行いますか？

武井：身体の機能を見て回復させると言いますか、corrective exercise などという言葉を使います。身体の機能を評価して、たとえば股関節が硬いとか胸郭が硬いとか身体の機能で何か問題があるかをチェックしたうえで、その選手に合ったセルフエクササイズというのでしょうか、そういうのを渡して、できるだけ未然にケガを防ぐという「予防」という点も担うところです。

大関：トレーニングの面でも指導しますか？

武井：そうですね。トレーニングの部分はストレングスコーチとかぶってきます。先ほども言ったように、アスレティックトレーナーはマイナス、またはゼロから現場復帰までですが、さらに現場復帰からいかにパフォーマンスを上げるかというのはストレングスコーチというように、ある程度、担当が分かれています。ですが、今は一人でさまざまな資格をもっている方が増えてきたこともあって、かなりリンクしてきています。

大関：理学療法士、アスレティックトレーナー、ストレングスコーチでは、それぞれ重なる部分もあり、両方の資格を取得している人もいるということですね。

武井：もともと、そういう方はいらっしやいましたが、今はさらに増えているような気がします。

アスレティックトレーナー発祥の地へ

大関：武井さんはなぜアメリカで ATC を取ろうと思ったのでしょうか？

武井：私は高校3年生のときに体育の先生になりたいと思っていました。当時、テニスをやっていたので、部活で高校生たちに球出しをして一緒に汗をかきたいという、単純な思いからでした。そして、たまたまアメフトを取り上げたテレビ番組で、選手がケガをしたときにグラウンドを走ってい

く人たちが映っていました。8万人くらいの観衆の中を走って行くのです。1人はドクターで、もう1人はアスレティックトレーナーでした。それを見ていいなと感じたのです。そこで調べてみたら、アメリカにその資格があることを知りました。これは、もう行くしかない、と（笑）。

もともとサッカー、テニス、野球の経験があり、スポーツに関わることをやりたかったのです。スポーツがもっている力、それが人を感動させるとか、喜ばせるとか、悲しませるとか、いろいろあると思うのですが、そこにずっと携わっていたいと思っていました。

大関：それが日本のアスレティックトレーナーではなく、アメリカだったのですね。

武井：アメリカ映画が好きでよく見ていましたし、アメリカに憧れがあったんだとは思いますが。

大関：その時点で英語は話せたのですか？

武井：いや、まったくできませんでした。ですから1年間、英語の専門学校に行って学びました。アメリカの大学のアカデミックな英語を学べるところが新宿にあるのです。私の周りには海外に縁のある者が、家族にも親戚にもいませんでしたから、情報がありませんでしたので、そういうところに行って、情報を仕入れるしかありませんでした。

ATC になるためのプログラム

大関：武井さんがアスレティックトレーナーと言っているのは、米国の NATA（全米アスレティックトレーナーズ協会）での資格を取得したトレーナーを指していると思いますが、「NATA 公認アスレティックトレーナー（ATC：Certified Athletic Trainer）」のほか、「BOC（資格認定委員会：Board of Certification）公認アスレティックトレーナー」という言葉もありますよね。

武井：一般的には ATC で通っていると思います。ATC の資格を得るためには、CAATE（Commission on Accreditation

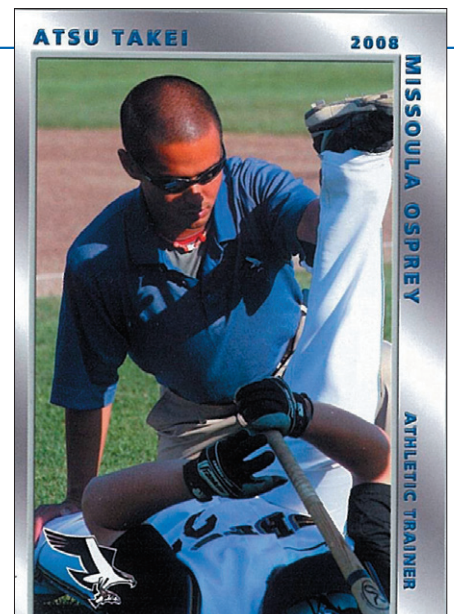


写真 MLB マイナーリーグアスレティックトレーナー時代のベースボールカード

of Athletic Training Education) に認定された大学を卒業してから、アスレティックトレーナーになるための試験 (BOC) を受け、合格すると取得できます。

私の大学はネバダ州立大学ラスベガス校 (UNLV: University of Nevada, Las Vegas) で、ここでは3年からそのプログラムに入ります。1年は2学期制ですので、そのプログラムをトータル5学期行います。5学期のプログラムのなかで、午前中は授業、午後は実習に行きます。実習は体育系の部活動に配属されて、職員の ATC の方や資格をもっている大学院生の下で研修を受けます。私のときは、トータル900時間以上の現場研修を受け、それが単位に換算されます。5学期のなかで900～1,500時間くらいの時間をインターンとして過ごします。

そのインターンも、コンタクトスポーツが確か25%入ってなければいけないというようなルールがありました。そうすると、みんな必ずフットボールを経験します。私の場合は、フットボール、水泳&ダイビング野球、水泳、ダイビング、女子サッカーときて、またフットボールでした。面白いのが、大学によっては地元の高校と提携しているところがあるのです。ラスベガス校もそうでした。そこに大学院生が行っていますので、研修先を高校で行うこともでき

ます。あとは、これはもうプログラムではないの個人の休みの時間になりますが、「シルク・ドゥ・ソレイユ」の演者のためのトレーニングセンターがあり、そこにはATCやストレングスコーチがいるので、そこで現場を見学できるなど、ラスベガスならではのユニークな経験をすることもできます。

私がいたときは、たまたま「USA SUMO アメリカ」という相撲巡業がありました。これは日本の相撲巡業ではなく、アメリカの相撲の大会です。力士はアメリカ人で、まわしをつけるのですが、お尻を出さずにスパッツを履いてやっていました。そこでトレーナー見習いみたいな感じですが、要望があればテーピングをしたり、ちょっとお手伝いしたりしました。

大関：そうした多くの実習を経て、正式に認定されたらATCになるということですね。900時間以上の実習というのはかなり長い、現場を大事にしているということですね。もちろん実地だけではなく、理論の勉強時間数も多いのでしょうか。

武井：はい。ほとんどの人が実技は800時間を優に超えますね。私も卒業するとき、確か1,500時間はとっていました。

大関：実際にATCに認定されるまでには、語学の問題を含めてかなりハードルが高いと思うのですが？

武井：そうですね、基本的にはアメリカに留学してCAATE (Commission on Accreditation of Athletic Training Education) に認定された大学を卒業してからになるかと思いますが、たとえば立命館大学にはATCを取るための独自のプログラムがあったと思います*。

(※編集部注：立命館大学に「グローバル・アスレティックトレーナー (GAT) プログラム」がある。CAATE公認のカリキュラムを備えた大学院をもつ米国のEast Stroudsburg University of Pennsylvania (ESU) と提携し、4回生の前期終了時までに立命館大学の卒業に必要な科目の修得を終え、夏頃からESU大学院へ留学し、立命館大学の学士号とESUの修士号の双方を取得することで、ATCの受験資格を得ることができるというプログラム。詳細は立命館大学HP (<http://www.ritsumei.ac.jp/shs/education/strength/global.html/>) 参照)。

大関：学部は何でしたか？

武井：私が行ったのはSports Injury management 学部でした。大学によって名前が違います。

大関：ATCの位置づけはどのようになりますか？

武井：位置づけとしては準医療従事者資格になります。

大関：更新もありますか？

武井：2年に1度、CEU (Continuing Education Unit) を取り続けなければなりません。単位が50単位です。最近の特徴としては、そのうちの10単位をevidence baseのクレジットを取らなければならないとなったのですが、それが日本にいる人にはちょっとハードルが高いです。オンラインはもちろんあるのですが、evidenceのレクチャーがなかなか少ないのです。したがって、JATO (ジャパン・アスレティックトレーナーズ機構) が主催しているevidence講習に日本人のATCが集まるという現状があります。10単位がevidenceベースで40単位が普通の講義で換算してというところですね。

大関：オンラインですか？

武井：そうですね。あとは年に1回、NATAのシンポジウムがアメリカであるので、それに参加したり、JATOのシンポジウムで単位を取ったりしています。

大関：Evidenceというのは、誰が資格をもった人の講習という意味なのでしょうか？

武井：日本にいる大学の先生でATC有資格者の方がメインです。その方がevidenceで認められた授業を行っています。

米国と日本の異なるアスレティックトレーナーの制度

大関：日本にも公益財団法人日本スポーツ協会 (JSPO：旧日本体育協会) 公認のアスレティックトレーナーという制度があります。JSPO公認アスレティックトレーナーとATCとの違いについて何か感じるこ

とはありますか？

武井：JSPO公認アスレティックトレーナーをもっている方は非常に知識が豊富と言いか、非常に勉強されているなどということを感じます。それはアメリカがすごいとか、日本がすごいとか、そういうことではなく、勉強熱心な方が多いということがまず第1印象です。ただ、現場経験の少ない人と多い人に分かれてしまっている印象があります。現場経験の多い方は自分から積極的にいろいろな現場を踏まれています。日本では自分でアクションを起こさないと、現場での経験が少なくなってしまうのかな、という印象があります。ATCには自動的にプログラムに組み込まれていましたし、たとえば大学のフットボールはNCAA division 1でそれほど強くないチームでもホームゲームで3万人くらい観客動員数がありますし、地元のテレビ局が放映し、選手もロッカールームがあつてボンと洗濯物を入れておけば、翌日にはたたんで置いてあるといったように、よりプロに近い環境にあり、そういう現場で経験できるというのが大きな違いでしょうか。

大関：日本の場合は人によって現場経験の多さに違いがあるということですね。ATCには必然的に長時間の現場経験のプログラムに組み込まれるから、実際のスポーツ現場を多く経験できているということですね。

武井：そうです。アメリカでは法律で、必ずチームにATCを置かなければいけないというルールがあります。日本では、鍼灸師や柔道整復師などの国家資格をもっている方が現場に出るためのツールとしてJSPO公認アスレティックトレーナーの資格を取っているという印象があります。

大関：アメリカの高校でもATCがいなくてははいけないのですか？

武井：はい。州によっては法律で決まっていると思うのですが。

大関：それは各スポーツチームにという意味ではなく、学校にということですか？日本で言えば保健室に養護教諭がいなくて



写真 ビーチサッカー日本代表フィジカルコーチ時代のトレーニング指導風景

はいけないというような意味合いですか？

武井：ラスベガスの場合は、当時、PTクリニックがラスベガス州のほぼすべての高校と契約しており、PTクリニックからATCが派遣される形で何百人という学生を1人で担当するといった感じです。おそらく訴訟問題が大きいのだと思います。フットボール部も高校は毎週金曜日に試合がありますので、そのときにATCが試合をカバーしています。また多くの高校にはチームドクターがいて、よくホームゲームに顔を出していて、何かあったら対応するという形を取っていました。

大関：それはずいぶん違いますね。日本の高校でチームドクターがいるアメフト部、ラグビー部というのはほとんどないと思いますし、アスレティックトレーナーがついてないところのほうが、まだ多いと思います。

武井：そういう背景からも、大関先生方がやられているスポーツ医学検定の役割は大きいと思います。なかなか日本ですべての高校でトレーナーを置くというのは難しいと思いますね。

大関：米国ではきちんと対価があるということですね？

武井：そうですね。ちゃんとフルタイムの仕事として確立されています。私の大学の先輩がアメリカで15年くらい高校で活動されていますが、最初はPTクリニックか

ら派遣されてパブリックスクールに行ったのですが、今はプライベートの学校に行っており、そこがかなりリッチエリアの人たちがいる学校なのです。確か、全米でフットボールで優勝するくらいのレベルにあり、高校とは思えないようなトレーニングやリハビリ施設があります。

施設的にも本格的なリハビリができたり、そういう恵まれた環境でフルタイムで働いている方もいます。

大関：日本にも同様のシステムがあればいいのと思うのは簡単ですが、現実的には金銭面のことも含めて難しいですね。学校の数と資格を持っている人の数を考えても難しいです。日本の大学でも、一般社団法人 大学スポーツ協会 (UNIVAS: Japan Association for University Athletics and Sport) も設立されましたから、少しずつでも選手を取り巻く環境が変わっていくといいなと思います。

スポーツ現場から健康産業や、会社の健康管理へ

大関：今年、5月11日(土)～12日(日)に『WFATT2019 第10回ワールドコンgres東京』が幕張メッセ国際会議場で開催されました。非常に大きな大会だったと聞いていますが、これはどのような集まりなのでしょう？

武井：WFATT ((世界アスレティックトレーニング&セラピー連盟: History of the World Federation of Athletic Training & Therapy) は、2000年6月に全米アスレティックトレーナー協会 (NATA) とカナダアスレティックセラピスト協会 (CATA) が主導となって設立された、世界のアスレティックトレーニン

グ&セラピーの加盟団体を統括している組織です。WFATTは2年に1度、所属する国が持ち回りで世界各国でコンgresを開催しています。2019年は東京オリンピックを控えていることもあり、日本での開催が決まり、JATO (Japan Athletic Trainers' Organization) が主催しました。参加者は500名ほどで、スポンサーブースも盛況でした。

今、アスレティックトレーナーは、フットボールで言えばサイドラインで待っているようなイメージ、何かあったときに対応するというイメージがあります。しかし、これからは、フィールドに出る前に予防していこう、エクササイズをしていこう、機能評価をしていこうという、PTの方々のようなイメージに近いかもしれませんが、そのようなアイデアを取り入れていきたい、もっと予防ということを謳おうというコンgresでした。

今回のコンgresのテーマは「Exercise For Total Health」でした。健康を維持する、Quality of Life を上げるためにもっとエクササイズをしましょう、というテーマでした。スポーツ現場で働いている方から、医療現場で働いている方、アメリカの軍関係者だったり、飛行機のボーイング社のアスレティックトレーナーの方が参加されました。本当に多岐にわたる講師の方が、アスレティックトレーナーの可能性について話し合いました。これからは企業において、会社の健康管理はもちろんリスクマネジメントの意味でもトレーナーを置いていくという意見が出されていました。ボーイング社でも工場でケガが起きるそうなのです。最初はリハ室でベーシックなリハビリをするそうです。飛行機の整備士さんなどは、たとえばボーイング787の下にもぐって作業をしなければならないというので、それと同じような動きになるように787の下にいて懸垂をさせたりするそうです。その話をされたボーイング社の方が「サイドラインではなく『on field』つまりフィールドで活動するんだよ」ということ

を盛んにおっしゃっていました。

大関：トータルヘルスという意味で言うと、日本は世界の中でもトップクラスの高齢社会です。日本整形外科学会も「ロコモ」ということを言ってきました。健康に対するアプローチはポテンシャルがありますし、今後はもっと広がっていきますので、そういうほうにもトレーニングやエクササイズが大事になってくると思います。私としては企業がそういうことに関わるというのは、新しい視点だと思いました。

大関：このほかにも JATO 主催のシンポジウムや研究会はいろいろあるのですか？

武井：JATO は基本会員向けの組織です。我々は資格発行ができませんので、どうしても会員向けの活動になってきます。毎年2・3月にシンポジウムを開催して、そこでいろいろなテーマを決めて講師を呼び、授業を受けて単位を取るということをしています。このほかに総会を開催し、規約などいろいろなことを話し合います。

2018 年、JATO は法人化をしました。以前は任意団体でしたが一般社団法人になりました。今年の3月に一般社団法人化してから最初の総会がありました。より厳格化した組織になり、さらに前進していこうと総会で確認されたところでした。

アスレティックトレーナーはスポーツ楽しさや喜びを共有できる仕事

大関：武井さんの個人的な活動について伺っていきます。武井さんは2013年に「Passion Sports Training」を設立され、トレーニング派遣などを行っているようですが、実際の活動はどのようなものなのでしょうか？

武井：今は浦安のフットサルチーム「バルドラール浦安」にフィジカルコーチとして参加しています。テニス、フットサル、ビーチサッカー、馬術などの選手や、一般人の方もみえています。基本はパーソナルトレーナーとして活動していて、日中は午前中に選手が来てトレーニングしたりとか、午

後には一般の方を見て、夜にはフットサルの練習に参加したり、という活動をしています。

大関：パーソナルでやるときというのは、トレーニング施設をどこで借りてやられているのですか？

武井：今はゴールドジムの原宿と銀座をお借りしています。クライアントの方にそこに来ていただいて、そこでトレーニングしているという現状です。もともと前職で関わりのあった人のトレーニングを始めて、徐々に口コミから依頼が増えていきました。また、2014 年からテニス雑誌の連載をしていたので、記事を見てくださって連絡をいただいた方もいます。

大関：今後、武井さんのようにアスレティックトレーナーになりたいという人は大勢いると思いますが、そういう方にメッセージをお願いします。

武井：アスレティックトレーナーというのは、私自身仕事のツールとして捉えています。それをもっていることによって、アスリートはもちろんコーチ、監督、フロント、学校の先生方などいろいろな方とお会いで

きて、コミュニケーションが取れるのです。非常にいい仕事だと感じています。しかもスポーツのバックグラウンドがありますので、スポーツ楽しさや喜びを共有できる仕事だと思っています。よりアクティブにスポーツ現場で働く、人のケアをする、人に自分の夢を託す、そういうようなことができる仕事だと、私は思っています。アメリカでも日本でもどちらでもいいと思いますが、スポーツ好きな人で現場で働きたい人は、ぜひ、アスレティックトレーナーになって喜びや、いろいろな人と共感してほしいなと思います。それをツールとしていろいろなスポーツ現場、健康産業分野などの道を切り拓いていってほしいなと思います。

おおぜき・のぶたけ 1976 年生まれ。兵庫県川西市出身。2002 年3月 滋賀医科大学医学部医学科卒業。2014 年3月 横浜市立大学大学院修了（医学博士）。2015 年3月 より東京医科歯科大学再生医療研究センタープロジェクト助教。現在、東京医科歯科大学スポーツ医学診療センター、八王子スポーツ整形外科非常勤医師としても勤務。整形外科専門医、日本体育協会公認スポーツドクター。日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ医。2015 年12月「一般社団法人日本スポーツ医学検定機構」を設立し、代表理事を務める。

第 6 回 スポーツ医学検定申し込み受付開始

日程／2019 年 12 月 8 日（日）

時間／3 級：午前 10 時 30 から、2 級：午後 1 時から、1 級：午後 3 時から

会場／東京（東京有明医療大学）、横浜（関東学院大学金沢文庫キャンパス）、群馬（育英メディカル専門学校）、大阪（大阪府柔道整復師専門学校）、福岡（福岡大学第二記念会堂）

※ 1 級は東京会場、大阪会場でのみ実施。

受験料／3 級（ベーシック）：4,800 円

2 級（アドバンス）：5,400 円

1 級（マスター）：7,800 円

※ 併願割引（3 級と 2 級：9,800 円、2 級と 1 級：12,400 円）

※ Web 検定（初級・ビギナー：980 円）は常時受検可能です。

申し込み方法／インターネット（https://spomed.or.jp/application_2.html）より申し込む。受験料のお支払はクレジットカード、コンビニ決済をご利用いただけます。

申し込み期限／2019 年 10 月中旬

※ 定員に達し次第、申し込み終了。詳細は HP 参照

問い合わせ／一般社団法人日本スポーツ医学検定機構

E-mail: support@spomed.or.jp

<https://spomed.or.jp/>